

イザベラ・バードの視点からみる アイヌ人描写による一考察

A Study of the Description of Ainus from the Perspective of Isabella Bird

平野 めぐみ
Megumi HIRANO

Abstract

I read *Unbeaten Tracks in Japan* of the Isabella Bird. I considered her description of her stay with Ainus, focusing on “Bird as the anthropologist”. Although she evaluated Ainus more highly than the Japanese, she measured the size of the head and height of some Ainus, she never did such a thing to the Japanese. She lived with some Ainus and judged that they were almost “uncivilized”. Measuring is a way to confirm this hypothesis. This action was like that of an anthropologist. Such gesture shows that she is more than a mere traveler.

Keywords : description, Ainus, anthropologist

キーワード：描写、アイヌ人、人類学者

はじめに

『目白大学人文学研究第7号』において、『日本奥地紀行』の分析を通してイザベラ・バードの異文化理解について考察した。

本稿では、バードが日本旅行において特に興味をもっていたアイヌ人に関する描写について分析し、考察を試みる。バードは旅行者として“unbeaten tracks”の旅行を楽しんだだけでなく、バードの鋭い観察力でもって、より深く日本旅行を楽しむこととなった。特にその観察力は、アイヌ人に出会ったときに発揮され、旅行者の視点とはまた別の人類学者的な視点を含んでいた。バードがアイヌ人との生活を通して得た描写を分析し、人類学者的な視点を追っていく。

第1節 アイヌ人について

アイヌ人について説明しておく。アイヌ民族は、本来、本州の北部、北海道、樺太の南部お

よび千島列島に居住していたと見られる狩猟採集民族で、現在の中国やロシアとの貿易や限定的な農業も行ってた。現在は北海道（25,000～300,000人）や関東圏（2,700～10,000人）に住んでいると推測されているが、差別に対する恐れなどから表明しない人もいるため、確かな数字は不明である。明治期以降に交付された法律や禁止令により、生活の糧であった狩猟や漁労が厳しく制限、禁止され、学校教育においては日本語の使用を強制されるなど、同化政策によりアイヌ文化は大打撃を受けた。2008年6月に、洞爺湖サミットに先立って、ようやく日本政府により日本の先住民族として承認された（官房長官による政府見解表明）。

バードは“unbeaten tracks”の旅を楽しみにして出かけたが、特に楽しみにしていたのが、アイヌ人と会うことだった。アイヌ人の住む場所へ出発する前日の手紙で「明日私は長い間計画してきた旅行に出発したいと思う。（中略）私はこの旅行を非常に楽しみにしている。原住民を訪れることは、きっと新奇で興味ある経験に満ちたものとなるであろうから」。⁽¹⁾とバードは述べている。彼女はアイヌ人に会うことを計画し、その実現をかなり楽しみにしていたことがよくわかる。同じように気持ちの高揚が感じられる、彼らの住んでいる場所に行く途中についての描写を次に挙げる。

私は札幌に至る「よく人の往来する道」から離れて嬉しかった。私の眼前には、どこまで続くか分からないような、うねうねとした砂地の草原が続く。これはヘプリディーズ諸島（スコットランド西北の諸島で、千島列島に相当する）の砂地に似て、砂漠のようにも淋しく、ほとんど一面に矮小な野ばらや釣鐘草におおわれている。どこでも好むままに道をつけて進めるような草原である。⁽²⁾

北海道に入ってから、彼女は“unbeaten tracks”のような人が通らない道を相変わらず好んでいることがわかる。ここでは“unbeaten tracks”に再び入った喜びを伝えている。そして彼女は土地だけではなく、道路にさえも魅力を感じていた。「道路は十三マイルの間まったく平坦で、砂利の平地や沼地を通った。非常に単調ではあったが、道そのものの野生的な魅力があった」。⁽³⁾北海道に入ってから、本州にいたときと比べると批判的な描写は減り、どちらかというと好意的な描写へと変化しつつある。

この傾向はアイヌ人に対する描写にも表れている。例えば、北海道の幌別という場所で人力車を引いてくれた青年に関して次のように述べている。

私はその顔形といい、表情といい、これほど美しい顔を見たことがないように思う。高貴で悲しげな、うっとりとして夢見るような、柔和で知的な顔つきをしている。未開人の顔つきというよりも、むしろサー・ノエル・パトン（英国の歴史画家）の描くキリスト像の顔に似ている。彼の態度はきわめて上品で、アイヌ語も日本語も話す。その低い音楽的な調

子はアイヌ人の話し方の特徴である。これらのアイヌ人は決して着物を脱がないで、たいへん暑いときには片肌を脱いだり、双肌を脱いだりするだけである。⁽⁴⁾

美しくて、高貴で、上品だという言葉は本州での旅行ではなかなか使われていなかった。そして彼を「サー・ノエル・パトンの描くキリスト像の顔に似ている」と、牧師の娘らしい表現で表すとともに、やはり自分の身近なものに例えるあたりが、好意的に思っている証拠だ。また、ここで出てきた「未開人」という表現についてはまた後ほど述べていこうと思う。

バードはこのようにアイヌ人を非常に評価していることがわかる。ここからは実際に彼女が生活をした様子を描いた「アイヌ小屋《平取》にて」という日記体で描かれた第36信をもとに、バードが感じたアイヌ人の良さや、すばらしさを分析していく。

アイヌ人との暮らしを描写している中で、彼女が何度も触れていることがある。それは、アイヌ人が彼女をよそ者扱いしなかった点だ。彼女が来日した頃は、まだあまり外国人が日本を自由に歩くことができなかった。そのため、外国人にとっても日本は新鮮だったが、逆に日本人にとっても彼らは物珍しい存在だった。本州を旅行しているときは、その土地の人々に注目され、プライバシーをまったく確保できないようなこともしばしばあった。例えば、福島県の猪苗代湖近くを旅したときの描写に次のような一節がある。

外国人がほとんど訪れることもないこの地方では、町のはずれで初めて人に会おうと、その男は必ず町の中に駆けもどり、「外人が来た！」と大声で叫ぶ。すると間もなく、老人も若者も裸の者も、目の見えない人までも集まってくる。宿屋に着くと、群集がものすごい勢いで集まってきたので、宿屋の亭主は、私を庭園の中の美しい部屋へ移してくれた。ところが、大人たちは家の屋根に登って庭園を見下ろし、子どもたちは端の柵にのぼってその重みで柵を倒し、その結果、みながどっと殺到してきた。そこで私はやむなく障子を閉めたが、家の外に押しかけてきている群集のことを考えると、名ばかりの休憩時間中は少しも心安まる暇はなかった。⁽⁵⁾

物珍しい外国人を見かけると一人で見るのではなく、野次馬が集まる。宿屋という彼女のプライバシーが守られるべき施設にまで野次馬は入って来て、彼らの目が光り続けていた。彼女は様々な場所を観察したり、眺めたり、行動したいにも関わらず、そのような状態では彼女の自由を確保するどころか、プライバシーも守ることができない。彼女はそのような経験を、多くの場所で味わってきた。しかしアイヌ人の態度は、本州の日本人の態度とは大きく異なっていた。「私の旅行体験の中でもっとも興味があったのは、アイヌの小屋に三日二泊泊まって、まったくの未開人の日常生活を見たり、一緒に暮らしたことであると思う。その間、彼らは、あたかも私がおの中にいないかのように日常の仕事を続けている」⁽⁶⁾ という描写にあるように、彼らは彼女を気にすることなく普通の生活を続けていた。同じような描写は続く。

しかし彼らは、日本人の場合のように、集まって来たり、じろじろ覗いたりはしない。おそらくは無関心なためもあり、知性が欠けているためかもしれない。この三日間、彼らは上品に優しく歓待してくれた。しかもその間彼らは、自分たちの日常生活と仕事をそのまま続けている。私は、日夜この部屋で彼らと一緒に生活をして来たが、彼らは少しも他人の細かい神経にさわるようなことをしなかった。⁽⁷⁾

彼女はここではっきりと日本人とアイヌ人の対応は違うと言っている。そしてアイヌ人が日本人のような態度を示さない理由として、「無関心なため、知性が欠けているため」と予測しているが、例えそうであっても、自分が見たい彼らの生活を誰にも邪魔されることなく、存分に自由に見ることができたということは彼女の旅行の成功を意味する。彼女は、アイヌ人のこの対応に感謝さえ述べている。「このように小さな親切の行為はいつも行われていた。しかし私は、彼らが日常生活の決まりきっている仕事を変わりなく静かに続けてくれたことに対して、何よりも心からありがたいと思った」。⁽⁸⁾

彼女が日本旅行でやり遂げたかったことは、アイヌ人だけでなく、日本人についても彼らのありのままの生活や慣習をみることだった。例えば、青森に行ったときの描写であるが、「ここは楽しいところである。私の部屋は明るくて清潔である他に、多くの長所を持っている。例えば、私の隣の人を見下ろすことができるので、婦人が結婚式へ出かけるために化粧をしているのを見ることができた」。⁽⁹⁾ このように誰にも邪魔されることなく、日本人の何気ないごく普通の生活の一部を見ることに日本旅行の意義を感じることができなのだ。だからこそ、バードを見るために自分のやることを放り投げて、物珍しい目で彼女をわざわざ見に来て、彼女のプライバシーのことも考えず、デリカシーのかけらもなく行動する日本人よりも、自分の存在を気にしないアイヌ人に対して好感を抱くのだと考えられる。

そのようなアイヌ人の対応に彼女は満足していた。しかしそれだけではないと思う。彼女の旅行の大きな目標のひとつはアイヌ人と出会うことだった。そして彼女の日本旅行が計画通りに成功すると思っている人は少ない状況でもあった。そうすると、彼女は自分がやってきた旅行は成功である、ということ伝えたい気持ちになるだろう。だからこそ、アイヌ人の良さを前面に出すことが、暗に彼女の旅行の成功を示していることになっているのではないかと考えられる。日本人のようにじろじろとバードを見るようなプライバシーを考慮しない対応ではなかったために、アイヌ人と会ってからの旅は彼女のやりたかったことが自由にできた。そして他の人がやったことがない経験もできた。そのような彼女に自由を与えた旅は、彼女にとって成功といえる旅になったのだ。

だから「彼女の存在を気にしないアイヌ人」という意味を含む描写があることによって、バードの旅行は大成功だったことを暗に強調していると言えよう。一見、バードはアイヌ人の良さやすばらしさを読者に伝えようとしているのかと思うが、実はそうではないのだ。そのようなアイヌ人に会えた自分が、本当にすばらしい、偉大な旅行をしたということを読者に伝える

のが彼女の狙いなのだ。だから彼女のこの作品を読むときには、描写されていることを素直に読み取るのではなく、彼女がなぜこのような描写をしたのか、なぜ何度も繰り返し強調し、描写する必要があったのかを読み取りながら読んでいくと、彼女の真の声が聞こえ、彼女の気持ちを感じることができると思われる。彼女の描写には、何か暗に示している、もう一つの意味合いが含まれているのでは、と思われる描写のテクニックが施された箇所が多々あった。そのような描写には彼女の本音が詰まっており、その読み取りが読者にとって面白いところであり、彼女の世界に引き込まれる所以だろう。

さて引き続きアイヌ人の良さや、すばらしさの描写を分析していく。彼女は、彼らの日常生活を気兼ねなく見ることができた喜びだけでなく、彼らの態度にも関心を寄せていた。彼らの挨拶と歓迎についての描写を二つ挙げる。

男たちは上品な挨拶をした。私たちは酋長の家の前で立ち止まった。もちろん私たちはこの家の思いがけない客であった。しかし、酋長の甥のシノンデと、もう二人の男が出て来て、私たちに挨拶をした。彼らは非常に歓待の気持ちをあらわして、伊藤を手伝って馬の荷物を下ろした。実に彼らの歓待ぶりは熱心なもので、一騒ぎとなり、あちらへ走るものありこちらへ走るものあり、見知らぬ人を一生懸命に歓迎しようとした。⁽¹⁰⁾

「私が寒さでひどく凍えて蚊帳から這い出したとき、部屋には十一人ばかりいて、みな私に上品な挨拶をした」。⁽¹¹⁾ 彼女はアイヌ人からの挨拶にも「上品」という言葉を使っている。「上品」というのは褒め言葉であるので、彼らを良く評価しているということが伝わってくる。歓迎に関しても「非常に歓待の気持ちをあらわし」と描写しているので、バードは彼らの歓迎の気持ちを素直に受け止め、好意を持っていることがうかがえる。

次にアイヌ人男性についての彼女の描写を考察しようと思う。「私たちが快適に過ごせるようにと、これらの男たちがてきぱきと動きまわる様は、天性の親切心と思えて実に心ひかれるものがあった」。⁽¹²⁾ 「すばらしい若者であるピビチャリは、私が登るのに困っている様子を見て、私に手を貸して登るのを手伝ってくれた。英国紳士ならやりそうな優しい態度であった」。⁽¹³⁾ アイヌ人男性は、彼女にとって好感を持てる存在だった。彼女に気を使い、尊重する様子は好印象を与えた。ここで、気になることをひとつ指摘しようと思う。彼女はアイヌ人を褒めるときには、西洋的要素をあげて好感度を描写している。上記のものだと、「英国紳士ならやりそうな優しい態度」ということで英国紳士が女性に対して優しく接する様子を比較対象として取り上げている。

また、同じような表現でアイヌ人女性を褒めているときにも使っている。「彼女の表情は厳しく近寄りたがいが、たしかに彼女は非常にきれいである。ヨーロッパ的な美しさであって、アジア的な美しさではない」。⁽¹⁴⁾ 「いちばん若い二人の女はとてもきれいである。私たち西洋人と同じほど色が白い」。⁽¹⁵⁾ ここは、バードが滞在している小屋の男たちが狩りで外に行き、7人

の女性と数名の子どもが小屋に残っているときの描写である。前者の文章の女性は首長の母親のことであり、後者は7人の女性の中でいちばん若い人に関しての描写である。「美しい」と言っているのだから、褒めていると判断できるが、どちらも先ほどあげたように「ヨーロッパ的」であったり、「西洋人」とあったりといったように、西洋的な意味合いを持つ言葉を取り入れて比較してその結果「美しい」という判断をしている。

男性を褒めている描写でもあったように、バードは西洋との比較に基づいて好意的な判断を下している。彼女の基準はもちろん自分の持っている価値観から評価をしている。その評価は、アイヌ人男性、女性であっても親切であったり、美しかったりという良い面を前面に出し、アイヌ人の良さをアピールしている。さらにその良さを「ヨーロッパ的」、「西洋的」という言葉で説明することで、手紙の読み手である妹にも良いものに映るし、日本にいるアイヌ人なのにそのような言葉で語られることでまた新たな魅力を伝えることができるだろう。

ここまで、バードが感じたアイヌ人の良さやすばらしさを様々な分野から分析してきた。彼らは彼女にとって彼女が描写した通りのすばらしい民族だったのかもしれない。しかしそこに隠れているのは、彼女の旅行の大成功を伝えることを暗に示した描写だった。上品な挨拶ができ、暖かく歓迎してくれる、魅力的なアイヌ人と自分は出会うことができたと、自分の旅行の成功や価値を自分で言わない代わりに、読者に読み取ってもらおうとする意図すら感じることができる描写である。

第2節 「未開人 (savage)」

バードの旅は“unbeaten tracks”にこだわり、その行く末の目的地は北海道にいるアイヌ人に会うことだった。アイヌ人を褒めた描写が多いのは、実際にそのような事実があり、そう感じたからなのかもしれない。しかしそれだけでなく、彼女自身の旅行を正当化し、成功を強調するための描写のテクニックであったとも考えられる、ということは述べてきた。いずれにせよ、彼女はアイヌ人に対して好意を抱いていたと言い切って良いだろう。しかし、そのような好意を持った彼らに対して彼女は「未開人 (savage)」と表現している。「未開人 (savage)」という描写の仕方は、マイナスの印象を持つ。どうしてそのような表現を使ったかを考察していこうと思う。

「未開人 (savage)」を、彼女は「未開」の生活をする人というそのままの意味で使用していた。「私は今ではアイヌ人の未開の生活を赤裸々に眺めることができるようになった。これはみじめな動物的生活をあまり抜け出していない生活である」。⁽¹⁶⁾ 彼女は彼らの生活を「みじめな動物的生活」や「暗く退屈」と表現した。彼女はアイヌ人を「未開人 (savage)」と表現したものの、彼女にとってはこのような民族に会うことが旅行の成功であるし、旅行の醍醐味だったのだ。

人々はみな起きていたが、この地の静けさは昨夜の静けさと同じく感銘させるものがあった。なんとという奇妙な生活であろう！何事も知らず、何事も望まず、わずかに恐れるだけである。着ることと食べることの必要が生活の原動力となる唯一の原理であり、酒が豊富にあることが唯一の善である！このような人々と触れ合うことのできる点がいかに少ないことか！⁽¹⁷⁾

ここの描写は、このような彼女とは違う生活を送る人々に触れ合いたいという彼女の気持ちが伝わってくると同時に、「このような人々と触れ合うことのできる点がいかに少ないことか！」という表現からはそのような希少価値の高い珍しい民族に自分は会うことができたのだ、という自慢めいた、自分の旅行の正当性、すばらしさを暗に強調しているようにも読み取れる。

そして「未開人 (savage)」と会ったことは貴重であり、自分の旅行の価値が高いことを彼女が強調している描写がある。それは、アイヌ人の危機を強調していることである。それが具体的に描写されている箇所を見てみよう。

アイヌ人は邪気のない民族である。進歩の天性はなく、あの多くの被征服民族が消えて行ったと同じ運命の墓場に沈もうとしている。⁽¹⁸⁾

どの家でもお客に対しては、同じような敬意が払われる。これは未開人の美德で、文明の大きな波が来たら、それを乗り切るだけの力はないように思われる。⁽¹⁹⁾

彼女は、アイヌ人という民族は発展していくよりも、消滅してしまうということを述べている。この彼女の考え方は、「社会進化論」に則っていると考えられる。これは、19世紀後半以降今日に至る社会風潮の流れを一括して、「社会ダーウィン主義」とも呼ばれる。この考え方はダーウィンの「進化論」の発想からきており、彼は環境に適応した種が残る、つまり極端に言うと、「最も優秀な種が世の中に残る」という理論を打ち出した。このロジックを民族に置き換えたのが、「社会進化論」である。⁽²⁰⁾ そうすると、「優秀な民族は生き残り、未開人 (savage) のような民族は残らない」ということを前提にしているのだろう。だから、「未開人 (savage)」という差別用語を用いたことにも悪気がないものと思われる。

話を彼女がアイヌ人の危機について述べている点に話を戻す。アイヌ人は北海道にいるからそこには日本人もおり、アイヌ人と混住の村があった。アイヌ人の方が人数が多くても、日本人の方に権限があった。「幌別は日本人とアイヌ人の混住の村で、海近くの砂上につくられている。このような混住の村では、アイヌ人は日本人に遠慮して近寄らずに住むことを強いられているが、日本人より数が多いこともしばしばある」。⁽²¹⁾ また、バードがアイヌ人にいろいろと質問をしていると、彼らから次のような要求があった。「彼らの風俗習慣を話したということ

日本政府に告げないでくれ、と嘆願するのであった。さもないと、どんな迷惑がかかるかわからない、というのである」。(22) 同じ日本にしながら、日本政府を恐れる存在だということは、何らかの形で圧力がかかり、追いやられているのだろう。彼らの存在が危ういということを物語っている。

アイヌ人の存在危機を描写することで、彼らの生活実態の解明が珍しいということだけでなく、彼らの存在自体が貴重になるときが必ずや訪れるということが示される。だから彼らに会ったというだけで彼女の旅行の価値、旅行記としての価値も高くなるということを示唆しているのだ。そういう認識があるからこそ、彼女のアイヌ人の見る目も違うのだろうか。彼女のアイヌ人描写は旅行者としての視線だけでなく、人類学者的な視線で描かれている。研究材料として扱うかのように、非常に細かな観察眼でもって彼らを調査しているのだ。このことについて次の節で述べようと思う。

第3節 人類学者としての視線

彼女はアイヌ人と会って、生活をともにしてきた。彼らは存在の危機に置かれるような民族ではあったが、「旅行者としてのバード」の要求に応えられる存在で、バードにとって頼もしささえ覚える描写になっていた。その思いの延長線上には、彼らをとことん調べるという行動があった。旅行者の視線では物足りなくなった彼女の踏み込んだ思いは、見て触れて考察する姿勢が必要な人類学者的視線へと変動する。その根拠を次に挙げる。

私はこの村の大人の男たち三十人の身長を測ってみたが、五フィート四インチから五フィート六インチ半にわたっていた。頭の周囲は平均して二二・一インチで、耳から耳までの円弧の長さは一三インチであった。デービス氏によれば、アイヌの大人の男の脳の平均重量は、アイヌ人の頭蓋骨の測定から確かめると、四五・九〇オンスで、この脳の重量は、インド平原のヒンズー教徒や回教徒のあらゆる種族、インドやイロンの原住民族のものを超えているといわれる。それに匹敵できるのはヒマラヤ山脈の民族、シャム人、中国系ビルマ人だけだという。さらにデービス氏は、アジア民族一般の平均脳重量を超えているという。この事実にも関わらず、アイヌ人は愚鈍な民族である。(23)

彼女は身長を測ったり、頭を測ったり、脳の重量についても調べている。このような行動は旅行者というよりも人類学者のような行動だ。

さてここで、バードを人類学者という目で見られた理由を述べておこうと思う。

自分の語ることを聴衆に本気で聴かせてしまう人類学者の能力は、事実を重んじているような外観や概念的な優雅さの雰囲気とよりはむしろ、自分が語ることは別種の生活形態に実際に透入した（なんなら逆にそれによって透入されたとしてもよい）結果である、つ

まりなんらかの仕方です「あちら側にいた」結果にほかならないということを読者に納得させる能力のほうと関係がある。(中略) 民族誌的記述の高飛車の性質—わたしはしかじかの名前の民族誌学者で、いま、こんな所で、こういう情報提供者の協力を得て、原住民と深い接触をしつつ調査している、調査経験も豊富だ、わたしはこれこれの文化を代表しており、しかじかの階級に属している、といったようなこと—がその著書の内容に、おまえはこれを信じるか、信じないならとっとと失せろ的な高飛車の性質を添えているのである。⁽²⁴⁾

バードは意図的なのか、自然に行ったことなのかはわからないが、頭の計測等を行う以前に、アイヌ人と生活をしたことについて強調し、彼らとの接触をかなり描写している。その描写によって彼らとの距離が近いことを読者に知らせ、彼女の観察力でもって彼らを調査し、その調査結果を詳細に描写している点は、ギアーツが述べているような人類学者そのものであるといってもよいだろう。彼女のそのような姿勢から、旅行者という彼女だけでなく、人類学者という新たな側面がうかがえる。

ここで話を戻して、彼女はなぜアイヌ人の頭等を計測したのだろう。それについて考えていく。

彼女は計測することによって、人種的レベルの高さを測ろうとしていたのではないかと思う。すなわち、「計測」が人種発達の尺度として使うことができると考えていた。その根拠として、「数字の魅力」という理論を挙げる。

十九世紀後半においては、人類学は単に進化論だけの時代ではなかった。もう一つの潮流が、これまた抗しがたい勢いで人間科学に押し寄せることになった。それは数字への魅力である(中略) 進化と定量化はとんでもない同盟を結ぶことになった。科学を根本的に誤解した多数の人々が定義するものを「科学」とするならば、すなわち、膨大な数字によって表面上裏づけられた主張を科学と定義するならば、この同盟は、ある意味で「科学的」人種差別主義の強力な理論を初めてねつ造することになった。⁽²⁵⁾

グールドは、数字で人種の尺度を測るものではないということを言っている。確かに数字は絶対的なものだから正確ではあるが、その数字を根拠にして人種を見極めようとするのには無理があり間違っているが、当時はバードが行ったような計測は科学者や人類学者にとって当たり前の事だった。彼によると、「近代統計学の先駆者であるゴルトンは、十分な労力と巧妙さをもってすればどんなものでも計測できるだろうし、計測は科学的研究の重要な規範であると信じていた」⁽²⁶⁾と述べている。近代統計学者も計測を重要な規範と示していたように、計測をすることは研究者のプロが行うことであつたようだ。バードが行った計測は、研究者のような真似事をしたように思われる。計測することがプロの証だと思ひ込み、「数字の魅力」に取り付か

れて、三十人もの計測を行ったのだろう。そのようなバードの行動は、人類学者の行動を真似たものだ。そのような行動からわかるように、バードは人類学者になりきっていた。だからこそ、人類学者のような視線で旅行をしていたのだろう。

おわりに

バードがアイヌ人を好意的な描写にしていたのは、アイヌ人そのものの良さだけでなくそこから手紙の読み手である妹をはじめ、この『日本奥地紀行』、*Unbeaten Tracks in Japan*の読者をも意識をしていることが伺える。自分の旅行の正当性、女性ひとりでの旅行に否定的な世の中に対して、実りの多い成功した旅行であったことを示すことができた。アイヌ人を「未開人」と表現したのもアイヌ民族の存在危機を連想させ、アイヌ人の価値、そして自分の旅行の価値も高くなることを示唆している。

またバードはアイヌ人の身長を測ったり、頭の高さを測ったり、日本人にはしてこなかった行動をした。その行動は旅行者を越えて、人類学者のようであった。アイヌ人への興味の深さを示すと同時に、アイヌ人の柔軟な対応があったからこそ、人類学者のように彼らをひとつの民族として観察できたことでもあった。そこにも、バードの旅行の偉大さを示すレトリックが使われている。

バードの旅行記には、読者を意識したレトリックが用いられ、それはバードの自己見解を立証しようとする潜在的な意図なのである。

本稿において、バードの旅行記の中のアイヌ人の描写を分析し、バードのレトリックそしてバードによる自己見解について考察してきた。イギリス人女性からみた日本人、そしてアイヌ人の描写によって日本人の姿をみることができた。このような作品を読む際には描写されていることを素直に読むだけでなく、描写をした理由を批判的に分析することによりまた別の側面がみえてくるのではないかと考えた。

今後の課題は、バードが旅をした日本以外の地域の旅行記を分析し、彼女の潜在的な意図を探っていきたい。

【注】

- (1) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 344ページ

原文は以下の通り

“I hope to start on my long-projected tour to-morrow… and look forward to it with great pleasure, as a visit to the aborigines is sure to be full of novel and interesting experiences”.

- (2) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 364ページ

原文は以下の通り

“I was happy when I left the “beaten track” to Satsuporo, and saw before me, stretching for I know not how far, rolling, sandy *machirs* like those of the Outer Hebrides, desert-like and lonely, covered almost altogether with dwarf roses and campanulas, a prairie land on which you can make

any tracks you please”.

- (3) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 361,362ページ

原文は以下の通り

“The road is perfectly level for thirteen miles, through gravel flats and swamps, very monotonous, but with a wild charm of its own” .

- (4) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 358,359ページ

原文は以下の通り

“I think I never saw a face more completely beautiful in features and expression, with a lofty, sad, far-off, gentle, intellectual look, rather that of Sir Noel Paton’s “Christ” than of a savage. His manner was most graceful, and he spoke both Aino and Japanese in the low musical tone which I find is a characteristic of Aino speech. These Ainos never took off their clothes, but merely let them fall from one or both shoulders when it was very warm” .

- (5) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 168ページ

原文は以下の通り

“In these little-travelled districts, as soon as one reaches the margin of a town, the first man one meets turns and flies down the street, calling out the Japanese equivalent of “Here’s a foreigner!” and soon blind and seeing, old and young, clothed and naked, gather together. At the *yadoya* the crowd assembled in such force that the house-master removed me to some pretty rooms in a garden; but then the adults climbed on the house-roofs which overlooked it, and the children on a palisade at the end, which broke down under their weight, and admitted the whole inundation; so that I had to close the *shoji*, with the fatiguing consciousness during the whole time of nominal rest of a multitude surging outside” .

- (6) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 373ページ

原文は以下の通り

“I think that the most interesting of my traveling experiences has been the living for three days and two nights in an Aino hut, and seeing and sharing the daily life of complete savages, who go on with their ordinary occupations just as if I were not among them” .

- (7) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 379ページ

原文は以下の通り

“[B]ut there is neither crowding nor staring as among the Japanese, possibly in part from apathy and want of intelligence. For three days they have kept up their graceful and kindly hospitality, going on with their ordinary life and occupations, and, though I have lived among them in this room by day and night, there has been nothing which in any way could offend the most fastidious sense of delicacy” .

- (8) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 396ページ

原文は以下の通り

“Little acts of courtesy were constantly being performed; but I really appreciated nothing more than the quiet way in which they went on with the routine of their ordinary lives” .

- (9) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 321ページ

原文は以下の通り

“This is a pleasant place, and my room has many advantages besides light and cleanliness, as, for instance, that I overlook my neighbours and that I have seen a lady at her toilet preparing for a wedding!” .

- (10) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 376,377ページ

原文は以下の通り

“[T]he men made their graceful salutation. We stopped at the chief’s house, where, of course, we

were unexpected guests; but Shinondi, his nephew, and two other men came out, saluted us, and with most hospitable intent helped Ito to unload the horses. Indeed their eager hospitality created quite a commotion, one running hither, and the other thither in their anxiety to welcome a stranger”.

- (11) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 387ページ
原文は以下の通り

“When I crept from under my net much benumbed with cold, there were about eleven people in the room, who all made their graceful salutation”.

- (12) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 378ページ
原文は以下の通り

“The alacrity and instinctive hospitality with which these men rushed about to make things comfortable were very fascinating”.

- (13) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 399ページ
原文は以下の通り

“When the splendid young savage, Pipichari, saw that I found it difficult to get up, he took my hand and helped me up, as gently as an English gentleman would have done”.

- (14) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 393ページ
原文は以下の通り

“Though her expression is so severe and forbidding, she is certainly very handsome, and it is a European, not an Asiatic, beauty”.

- (15) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 394ページ
原文は以下の通り

“Two of the youngest women are very pretty—as fair as ourselves”.

- (16) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 403ページ
原文は以下の通り

“I see it in all its nakedness as a life not much raised above the necessities of animal existence”.

- (17) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 388ページ
原文は以下の通り

“[T]he silence of the place, even though the people were all astir, was as impressive as that of the night before. What a strange life! knowing nothing, hoping nothing, fearing a little, the need for clothes and food the one motive principle, *sake* in abundance the one good! How very few points of contact it is possible to have!”.

- (18) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 370ページ
原文は以下の通り

“[A] harmless people without the instinct of progress, descending to that vast tomb of conquered and unknown races which has opened to receive so many before them”.

- (19) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 389ページ
原文は以下の通り

“In every house the same honour was paid to a guest. This seems a savage virtue which is not strong enough to survive much contact with civilisation”.

- (20) 相賀徹夫「社会ダーウィン主義」『日本大百科全集11』（田中義久編）小学館 1986年 284ページ

- (21) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 356ページ
原文は以下の通り

“Horobets, a mixed Japanese and Aino village built upon the sand near the sea. In these mixed villages the Ainos are compelled to live at a respectful distance from the Japanese, and frequently

outnumber them”.

- (22) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 382ページ

原文は以下の通り

“Before they told me anything they begged and prayed that I would not inform the Japanese Government that they had told me of their customs, or harm might come to them!”.

- (23) イザベラ・バード 『日本奥地紀行』 高梨健吉訳 平凡社 2000年 408ページ

原文は以下の通り

“I have measured the height of thirty of the adult men of this village, and it ranges from 5 feet 4 inches to 5 feet 6 1/2 inches. The circumference of the heads averages 22.1 inches, and the arc, from ear to ear, 13 inches. According to Mr. Davies, the average weight of the Aino adult masculine brain, ascertained by measurement of Aino skulls, is 45.90 ounces avoirdupois, a brain weight said to exceed that of all the races, Hindoo and Mussulman, on the Indian plains, and that of the aboriginal races of India and Ceylon, and is only paralleled by that of the races of the Himalayas, the Siamese, and the Chinese Burmese. Mr. Davies says, further, that it exceeds the mean brain weight of Asiatic races in general. Yet with all this the Ainos are a stupid people!”.

- (24) クリフォード・ギアーツ 『文化の読み方/書き方』 森泉弘次訳 岩波書店 1996年 6ページ

- (25) スティーヴン・J・ゲールド 『人間の測りまちがい—差別の科学史』

鈴木善次、森脇靖子訳 河出書房新書 1989年 81ページ

- (26) スティーヴン・J・ゲールド 『人間の測りまちがい—差別の科学史』

鈴木善次、森脇靖子訳 河出書房新書 1989年 82ページ

(平成23年11月9日受理)